

汲古一心

— 講演より —
『書の現代性』(十)

中村素堂

徳川時分に勘亭流とか御家流とかありますが、全部を通しての時代性といえは御家流といえるでしょうか？ じゃ御家流が名筆だったかといえは、あなた方、金を出して買う気がありますか？ ないでしょう。それと同じ事です。時代性があつたから、みなうまいとはいえないんです。その中で、少なかったけれども、この人の字は流行らなかつた。しかし今見ると随分立派だと思ふものがあります。平賀元義という万葉ぶりの歌を作つたので有名ですが、荒つけずりの素晴らしい歌です。その書など、あれだけの根性を持った人でなければ書けないでしょう。いつか一幅半切にほとんど漢字みたいなもので書いてある物を買つたのですが、今でも掛けてみてたまげますね。徳川時分にこんなものがあつたか——幕末の人ですが、買つた時に松井先生にお話ししたら、「いいねえ」とおっしゃつてましたけれど、そんなものもあります。ですから、少数でも識者に出会つた時には、そこで大変レグランスを起こしてくれるわけです。数でいうのが現代性だということになると、今でもそうじゃないですか。この間うちまで、モダンだ、モダンだと思つていたのが、少し通俗になつてゐるものなんかありませんか？ 展覧会を見ても、ここでもこんなふうに見えるのかと思いませんか？ この間も行って見ていると、随分通俗だなあとと思う。通俗じゃなかつたんですよ。非常に斬新なものだつたのですが、あんなに流行つてしまうと、向こうから来る人も紺がすり、こっちから来る人も紺がすり、全部そうだったら、お仕着せの半纏だと思つて着てみたいと思わないでしょうか？ やはりその中で、少数だけれども素晴らしいものを着ている人に会つた時に、かえつて着たいと思う。あまり同じものが流行つてはいけません。心ある人達は、弟子は弟子で、自分の好きなものを書いてくれるほうがいいんだという人があるけれども、利口な人です。おれと同じようなものを書かれちゃかなわんといわれる。安

つばくになりますよ。稀少性というものはあるんですね、ある程度。まづいほうの稀少性なんてないんですよ。珍しい存在じゃないんですから。まづいことでも、おれのは少ないから稀少性があるなんてわけにはいかないんです。稀少性というのは、輝くばかりのわずかなければいけない。(了)

〔祭墨〕、昭和五十二年十月

『一言以つて囁す』

東洋の芸術は非常に簡素なものの中に、極めて深い内容を持たせたものが多い。書道などは、その典型的なもので、簡潔な一線の中に載せられている形象的の美、精神的の美、人間世界の長い時代の厳しい批判に堪えて、なお高い鑑賞価値を維持しているのは、その内容のいかに豊かなものであるかを物語つていゝものではあるまいか。これが近時の東西交流の時運にあつて、海外芸術家の眼に映つた批評も、あらゆるものは東洋人よりもうがつた説をなし、われわれをして傾聴すべきものさへ現れるようになってきた。しかしこれらの作品群は、みな長い技術的鍛練を経て、しかも作者自身も人間としての深い教養を積んで到達した高い境地に咲いた華なのである。

書の道もまた他のあらゆる芸術と同じように、それはひとつのけわしい修業道でもある。一筆一筆の修練を怠らないもののみが、その深い法悦境に参入するものである。

鉄は赤い間に鍛えなければならぬという。たしかにそうである。その道を志した初志を堅持して、青春の迫力旺盛の間に不休の鍛錬を遂げられて現代の息吹きの十分に通つた先人未踏の新興趣を開拓して、東洋伝統の先端にまた大きく美しい華を咲かせてほしいと切望してやまないものである。

〔筆間雜記〕中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。

〔乾惕〕、昭和三十五年